

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11505

研究課題名(和文) 看護学生の実践的コミュニケーション能力の獲得に向けた段階的教育プログラムの検討

研究課題名(英文) A study of step-by-step education programs for nursing students to learn practical communication skills

研究代表者

井村 香積 (Imura, Kazumi)

三重大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：00362343

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：臨床実習終了後の看護学生に実習でコミュニケーションを困難に感じた場面等について質問紙調査を行った。結果、患者、スタッフ、等とのコミュニケーション場面に困難を感じていた。特に患者との会話では病気を伴うことについてのコミュニケーションに困難を感じていた。指導看護師に新人看護師がコミュニケーションで困っている場面とその内容等について質問紙調査を行った。結果、スタッフや患者との対応の場面等であった。スタッフとの場面では【報告・連絡・相談の不十分さ】患者との対応場面では【患者の思いを汲み取ることが不十分】等であった。これらより到達目標はスタッフと患者へのコミュニケーション技術の獲得が抽出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護学生が卒業時に到達すべきコミュニケーション能力について、看護学生のコミュニケーションの実態と指導看護師が新人看護師に求めるコミュニケーション能力を明らかにし、その両者から、到達目標をすり合わせ、到達目標を提示したことは学術的意義である。到達目標を提示することによって、それに合わせ教育プログラムを検討することができることは社会的意義である。

研究成果の概要(英文)：The present study involved nursing students who had just completed practical clinical training and a questionnaire survey was conducted regarding difficulties in communication that they experienced. The survey suggested that they primarily experienced difficulties in communicating with patients, especially in conversations related to diseases and symptoms, and with other medical staff. A questionnaire survey was also conducted with supervising nurses regarding communication difficulties experienced by new nurses and their details. The new nurses had difficulties in communicating with other health care professionals: [Incomplete reporting, communication, and consultation] and patients: [Insufficiently paying attention to the feelings of patients]. Learning skills for communicating with medical staff and patients were extracted as an achievement goal.

研究分野：看護教育学

キーワード：コミュニケーション 看護学生 教育 臨床現場

1. 研究開始当初の背景

看護学生のコミュニケーション能力の低下が指摘され、学生のコミュニケーション能力の向上を目指した新しいカリキュラムが2009年4月より施行され、様々な取り組みが報告されている。看護学生のコミュニケーションに関する研究を概観すると、コミュニケーション教育方法の工夫として実習での患者との関わりを振り返ること、実習初期と後期にロールプレイを取り入れたり、学生に患者との関わりを振り返りさせたりすることの重要性が報告されている。しかし、看護学生は未だ患者とのコミュニケーションを困難に感じており、これらの取り組みは、学生が患者とのコミュニケーションにおいて感じている困難に対して、有効な教育方法になっていないといえない。その原因として、**これらの取り組みが単発的に行われており、学生の継続的な成長を支援できるような継続的な取り組みになっていないことが推察された。**

そこで、申請者は4年間を通じた看護学生のためのコミュニケーション教育の必要性を掲げ、基礎的なコミュニケーション技術の育成を目指した教育から、応用力のあるコミュニケーション能力の育成を目指した教育に取り組んできた。その成果として、看護学生が他者とのコミュニケーションのなかで「自分の感情を理解する」能力を向上させることは実証できた。しかし、**「状況に応じたコミュニケーション」能力の向上はわずかであり、教育の有効性を実証できなかった。**これは、教育に使用した「状況設定」が学生に適切でなかったことや、学生が状況に適した伝え方に戸惑いがあったことがコミュニケーション能力の向上につながらなかった原因であると考えられた。そのため、教育場面にふさわしい「状況設定」がコミュニケーション教育の鍵になり、「状況設定」を教育場面で使用することで、より実践的なコミュニケーション教育になると推察される。これらのことを踏まえ、今回、**学生の状況に応じたコミュニケーション能力が習得できる教育プログラムを検討し実施することで、卒業時の看護学生のコミュニケーション能力は実践に対応できる能力になると考えられる。**

実践に対応できるコミュニケーション教育を考える際、臨床の求めるレベルを考慮する必要がある。そのため、**看護学生のコミュニケーション教育に使用する「状況設定」は、臨床現場で求められる実践的なコミュニケーション能力を踏まえた内容にすることが肝要**となる。それには、臨床現場の新人看護師に求められるコミュニケーション能力を明確にすることが必要である。その上で、看護学生のコミュニケーション能力の現状と臨床現場が求める新人看護師のコミュニケーション能力をすり合わせることで、看護学生の卒業時の到達目標を設定することが可能となる。そこから看護学生の入学から段階的な到達目標に具体化し、看護学生のコミュニケーション能力の向上に応じ、臨床場面に踏まえて段階的な「状況設定」を盛り込んだ教育プログラムが実現可能となる。

このような教育プログラムを実施することで、看護学生は実践的なコミュニケーション能力を習得することができ、卒業時の看護学生のコミュニケーション能力と臨床現場が求める新人看護師のコミュニケーション能力の乖離を埋めることに貢献できると考える。

2. 研究の目的

本研究は看護学生のコミュニケーション能力の現状と臨床現場が求める新人看護師のコミュニケーション能力をすり合わせ、看護学生の卒業時の到達目標を設定し、実践的なコミュニケーション教育プログラムを構築することを目的とする(図1)。

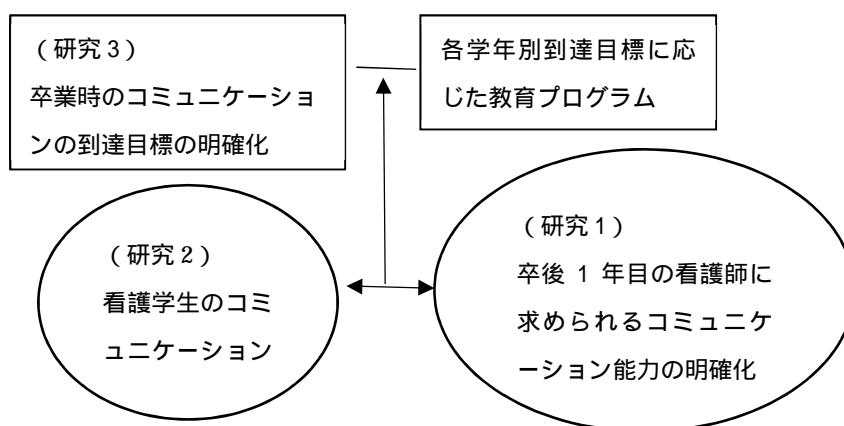


図1 研究の概念枠組

3. 研究の方法

研究1「卒後1年目の看護師に求められるコミュニケーション能力の明確化」

対象と方法：新卒看護師を指導した経験がある看護師98名に質問紙調査を行った。質問内容は新人看護師がコミュニケーションで戸惑っていると捉えた場面とその内容、身につけて欲しいコミュニケーション等である。

分析：質的帰納的分析

研究2「看護学生のコミュニケーション能力の現状」

対象と方法：領域実習を終えた看護学生 136 名とし、コミュニケーションで困った相手、場面とその具体的な内容等について質問紙調査を行った。

分析：質的帰納的分析

研究3「卒業時のコミュニケーションの到達目標の明確化」

対象と方法：看護系大学教員に 3 名に対し研究 1.2 の結果を提示し、看護学生の到達目標についての考えを半構造化面接で調査した。

分析：質的帰納的分析

4. 研究成果

研究1「卒後1年目の看護師に求められるコミュニケーション能力の明確化」

新人看護師がコミュニケーションで戸惑っていると指導看護師が捉えた場面は、スタッフ同士への対応 50 名、患者への対応 34 名、家族への対応 3 名、その他 11 名であった。その内容をみると、スタッフへの対応では、【報告・連絡・相談の不十分さ】が抽出された。【報告・連絡・相談の不十分さ】では、何を伝えるべきか情報が整理されていない、先輩から言われないと相談しない、自信なさげに報告する、社会人としての言葉遣いでない等があった。患者への対応で【患者の思いを汲み取ることが不十分】【不適切なコミュニケーション】等が抽出された。【患者の思いを汲み取ることが不十分】では患者の気持ちを押し量った言動がとれない、一方的なコミュニケーションをとること等であった。【不適切なコミュニケーション】では、尊敬語が使えない、敬意を持った言動が取れないなどがであった。【家族への対応】では、家族が何を求めているかを理解していない、家族の思いをくみ取った言動が取れない等であった。その他では、自己防衛的なコミュニケーションをとる、患者の不満に対しての不適切な言動等があった。

研究2「看護学生のコミュニケーション能力の現状」

看護学生がコミュニケーションで困難に感じた対象者についての回答は、患者 112 名、スタッフ 17 名、家族 3 名、指導者 4 名であった。患者とのコミュニケーションに困難を感じた内容は【病状や治療に対する患者の思い】【構音障害により意思疎通がはかれない】【精神疾患をもつ患者とのコミュニケーション】【患者のペースでの会話】【患者と学生との心の距離】であった。【病状や治療に対する患者の思い】【構音障害により意思疎通がはかれない】【精神疾患をもつ患者とのコミュニケーション】が抽出されたことより、病気を考慮しながらコミュニケーションをとる能力が不足していることが示唆される。【病状や治療に対する患者の思い】を表出されて困った学生の対応は「病気とは関係のない話をする」「頷く」「沈黙」などであった。【構音障害により意思疎通がはかれない】時の学生の対応は「文字盤の使用」「closed question」等であった。【精神疾患をもつ患者とのコミュニケーション】では、患者との距離をおく、日常的な会話を行うように心がけるなどであった。

研究3「卒業時のコミュニケーションの到達目標の明確化」

【患者への適切なコミュニケーション技術の獲得】【スタッフへの適切なコミュニケーション技術の獲得】が抽出された。【患者への適切なコミュニケーション技術の獲得】では、尊敬語を使って会話をとることができる、患者の思いを汲みとることができる、患者の思いに応じた言動をとることができる、沈黙が生じた時や患者の病気に対する思いを聞いたが病気とは関係のない話をする際の自己の気持ちを洞察することができるなどがあった。

【スタッフへの適切なコミュニケーション技術の獲得】では、何を伝えるかを自分のなかで情報を整理することができる、相手に理解できるように伝える情報を組み立てることができる、報告・連絡・相談すべき内容について理解できるなどがあった。

これらのことから、1 年次から 4 年次の教育プログラムを考える。【患者への適切なコミュニケーション技術の獲得】では、1 年次では尊敬語を使う意図、ロールプレイ尊敬語を使った患者との会話を行う。患者の思いを汲みとることができるように、病気を持つ患者の思いを語った教材を活用し、学生の自己の感情を洞察する演習を行う。2 年次では、病気を持つ患者の思いを理解した上で、学生自身の思いを伝える演習を行う。3 年次では、臨地実習で、患者の気持ちを汲み取った会話ができただかを客観的に振り返ることができるように教員とともに振り返る。4 年次では、看護において【報告・連絡・相談】が必要な場面や内容を考えられるような教育を行う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Imura Kazumi, Hayashi Tomoko
2. 発表標題 Frustration of students with healthcare workers in clinical practice in nursing
3. 学会等名 21st EA FONS & 11th INC (Soul, Korea) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Imura Kazumi, Hayashi Tomoko
2. 発表標題 Nursing Students' Emotional Intelligence Levels and Their Learning from the Difficulty in Communication with Patients during Clinical Training
3. 学会等名 4th Japan China Korea Nursing Conference
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	足立 みゆき (Adachi Miyuki) (20263494)	滋賀医科大学・医学部・教授 (14202)	
研究分担者	林 智子 (Hayashi Tomoko) (70324514)	三重大学・医学系研究科・教授 (14101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	水野 節子 (Mizuno Setuko) (60737964)	日本福祉大学・福祉経営学部・助教 (33918)	
研究 分 担 者	石倉 夏海 (Ishikura Natumi) (70779371)	三重大学・医学系研究科・助教 (14101)	